

## 外国での越年の思い出

彌 永 昌 吉 (数学・名誉教授)

私は 1931 年 8 月 (25 才のときであったが)、渡欧し、3 年間ヨーロッパに滞在した。その間に 3 回あちらのクリスマスやお正月を経験したわけである。滞在した国は、主としてドイツとフランスであったが、休暇中にはあちこち旅行もした。もう古いことであるし、日記もつけていなかったのだから、記憶のさだかでない点もあるが、1932 年から 33 年への越年のときは、三村征雄夫妻と一緒にフランスからイギリスに旅行し、英仏海峡の船の中でたしか新年を迎えたように思う。今日のように飛行機が発達していなかったから、Dieppe まで汽車で行き、何時間かを連絡船の上で過した。しかし、年が変わるからといって、連絡船の上では特別の行事もなかったと思う。1932 年のクリスマスはパリで過したのであったが、フランスはカトリックの国で、深夜のミサに家族づれでゆくなど、宗教的・家族的な行事はあっても、街頭で Jingle Bell の音楽が鳴り響くようなことはなく、むしろ静かなクリスマスであった。

1931 年のクリスマスのはときは、ドイツのハンブルクにいた。第 1 次大戦やそれに続く inflation は、もう何年か前にすんでいたが、そのころのドイツはまだ疲弊していた。(2 年ほど後の 1933 年には、Hitler が首相となる。) 町の広場では“国営とみくじ”(Nationallotterie) などが売られていた。クリスマスのころになると、その広場に Stille Nacht, Heilige Nacht... の音楽が大きな音で流され、いかにも新教国のクリスマスらしい雰囲気が出される。その印象は今も忘れられない。

1933 年のクリスマスのはときもハンブルクにいた。その年のクリスマス・イーヴには、Emil Artin 教授のところに招かれた。教授はまだ 35 才の若さであったが、数学者としても、人物としても私たちの敬愛的であった。当時は夫人との間に満 1 才ほどの長女の Karin がおられた。私は町のおもちゃ屋で、Karin のための小さなおもちゃを買ってプレゼントしたが、お宅へ行き、ほかのおもちゃの側へおくとそれは小さ過ぎたようであった。——Karin は、今は Mrs. Tate として何人かのお子さんがあり、Artin 教授と同じように碧眼長身である。そのころはもちろんかわいい赤ちゃんであった。

パリには日本の大使館があり、ハンブルクには領事館がある。パリの当時の長岡大使は私の父の知り合いであり、ハンブルク領事館におられた青山義徳氏には、ベルリンの長井重歴山氏から紹介されたので親しくしていただいた。お正月には大使館や領事館で在留邦人を招かれる。上のようにして記憶をたどってみると、1932 年、1934 年のお正月は両方ともハンブルクにおり、1933 年にはロンドンにいたことになるが、ロンドンでは特にお正月らしい光景に接した記憶がなく、他方ハンブルクの領事館にも、パリの大使館にもお正月に招かれていったことがあるような気がする。あちらのお正月に特別の装いが無いのは普通であるが、1932 年から 33 年への越年を英仏海峡でしたといったのは間違いであったかもしれない。あるいは、パリの大使館でご馳走になったのは、お正月ではなくて、何か別の機会であったのかもしれない。その辺の記憶が不確実で申訳ないが、クリスマスについては、あちらへ行って最初の年 (1931) と、こちらへ帰る前の年 (1933) はハンブルクで、1932 年のときはパリで送ったのはたしかである。

戦後になってから、1960 年の夏に家内と一諸にヨーロッパに出掛け、ドイツ、フランス、スイスで夏休みを過した後、アメリカにゆき、秋から翌年 3 月まで北米合衆国にいた。アメリカで一番長くいたのはシカゴ大学であるが、クリスマスの休みには東部にゆき、プリンストン、ニューヨーク、ボストンで過した。家内は古くから聖公会の信者で、私も戦後洗礼を受けた。1960 年のクリスマス当日は、ニューヨークの NYU に近い Grosvenor Hotel に泊っていた。ちょうどその向いに聖公会の大きな教会があり、その礼拝に出席した。ニューヨークやボストンの町のクリスマスの装いも忘れぬが、一番印象的であったのは、ニューヨークのバスの station の一隅で (ご存じの方も多いと思うが、それは諸方へ行く路線のバスの出るところで、ずいぶん大きな建物である) あちこちの教会の合唱団が代る代るクリスマスの歌を唱っていたことである。混声のものもあり、女声のものもあり、子供を主とするのもあって、指揮者もいろいろであったが、唱っていたクリスマスの歌は私たちがよく知っ

ている classical なものであった。バスを待つ間、しばらく家内と一緒に聞き惚れていた。

ニューヨークからプリンストンへは、バスで一時間程である。クリスマス・イーヴの晩であったかどうか記憶が確かでないが、とにかくそれに近い日の晩、プリンストンの André Weil の家に家内と招かれた。一家の人たちと一緒に夕食をご馳走になった後、Weil が“君にも Santa Claus のものがあるよ”とって Simone Weil の *Ecrits de Londres* をプレゼントされた。André と Simone は兄妹であるが、Weil は思想家として著名な妹のことをあまり人に語ろうとはしない。しかし、Simone のことをいつも考えてはいるのである。実際、Simone ほどの妹をもてば、忘れることはできないであろう。

私は東大を 1967 年に定年退官したが、その年の秋からの 1 年間フランスのナンシー大学で過した。そのときも家内と一緒に出掛け、ナンシーの 82 Avenue Foch というところに住んだ。その年のクリスマスは、カードやプレゼントのやりとりはもちろんしたが、招いたり招かれたりはしなかった。ナンシーには聖公会の教会はな

いが、カトリックの教会はたくさんある。家から近い教会の深夜ミサに家内と一緒に参列した。少し寒かったがよいミサであった。(聖公会とカトリックでは儀式はほとんど同じである。)

1968 年の 1 月 1 日朝、少しゆっくり寝ていると、ベルの音で起された。家内が表のドアをあけてみると、雪の降る中に町のお菓子屋の女店員が立っていて、Jean Cartan さんからのお申付けです、といい、お菓子を一箱届けて来たのであった。フランスでは *étrenne* といって“お年玉”をおげる習慣がある。Jean Cartan は Henri Cartan の長男で、日本へ来られたことがあり、今は日本人の夫人を持っておられる。日本にも“お年玉”の習慣のあることを知って、私たちに贈物をされたのであったのかもしれない。(もっとも、日本では元日に物を届けてくれる店はないであろう。)

学会や委員会出席などのために、短期の旅行をしたことも入れれば、私もずいぶん何度も外国へ行ったことになるが、今まで外国で年を越したのは、以上の 5 回だけしかない。(1973 年 12 月記す)